

「お疲れ様でした」

店主に一礼し、バイト先の古書店を出ると、空は茜色に染まっていた。

今日もよく働いた、と独り言ちながら何度か伸びをして、それから僕は、視界いっぱいに広がる街を眺めた。

なんとということはない、どこにでもありそうなこの街は、しかしかつて、その全てを焼き尽くされた。

魔術王による人類史焼却。

世界を滅ぼしかけたその企みは、とある組織によって阻止された。

「……………」

そんな過去などなかったかのように、街は人の営みで溢れていた。

視界に映る商店街には、家路を急ぐ人々の姿が在る。

誰もが皆忙しなく、しかし確かに生きていた。

「……………」

胸の内を、万感の思いが満たす。

確かに自分は、この世界を救ったのだと。

自分たちの手で拒んだ過去であっても、あの日々を忘れることはない。

何もかもが黒焦げになったあの焼け野原を、今でも覚えていてる。

そこで得た出会いや別れも、鮮明に記憶している。

——しなやかに槍を振るう魔境の主の事も。

「……帰ろう」

僕もまた、街の人たちと同じように家へと急いだ。

愛すべき我が家。

今の自分にとって、帰るべき場所。

バイト先から二十分。

大橋を渡った先にそのアパートは存在する。

「……地震怖いなあ」

十人中十人がオンボロと言うであろうその外観に苦笑が漏れる。

影の国よりはマシと言ってこのアパートへの居住を決めた相手は、住めば都とい

うことで慣れ始めているようだけど、個人的にはもう少し綺麗な所に引越したい所存だ。

なにせ大事な、きつと世界で一番大切な人を住ませるのだから。

……まあ、今のところ主に予算の都合で引越しの予定はないんだけど。

甲斐性なしな自分に半ば呆れながら錆びついた階段を上る。

二階の端。

日当たりだけはいい角部屋の、これまた古臭いチャイムを押すと、ドアの向こうから。パタ。パタと足音が届き、そして、

「帰ったか、マスター」

そんな、落ち着いた声が僕を出迎えてくれた。

エプロン姿の彼女は、その美しい容姿に少しばかりの笑みを滲ませていて。

それを見ただけで、今日一日の疲れが吹き飛ぶのが実感できた。

「うん、ただいま。……ただいま、スカサハ」

誰よりも大切な彼女に、僕は出来る限りの笑顔を返した。

世界を救った後、僕はカルデアには残らず日常に帰るという選択をした。

元々、魔術の腕はからつきしだったから、カルデアの研究者として残るといっのは少し無理のある話だった。

ダヴィンチちゃんを始めとしたメンバーたちは別れを惜しんでくれたけど、最後には快く送り出してくれた。

『元気でね。君に最上の幸福があることを祈るよ』

涙ながらに僕の手を取り、笑顔を見せてくれたダヴィンチちゃんの顔を覚えてい

る。  
そうして、僅かな資金と幾つかの魔術礼装を手に、僕はカルデアを出ただけど  
……。

「さて、今夜の献立だが」

「肉の丸焼きだね！ 分かるとも！」

「ん？ お前がそうなりたいなら叶えてやらんでもないが？ ん？」

「ごめんなさいはしやぎすぎました……」

「全く……そら、運べ」

「はい……」

彼女に皿を渡され、そこに載っていた料理に僕は目を輝かせた。

「わ、ハンバーグだ！ 僕大好きなんだよねこれ！」

「そうか。それはよかったな」

「ふふ、嬉しいなあ。うわぁ人參のグラッセまである！」

「子供のようにはしゃぐな、お主は」

「ご、ごめん……落ち着きます」

「いや、かまわんさ。好物の前でくらい、好きにはしゃぐがいい。お主のその純朴さは紛れもなく長所だからな」

「そ、そっか……ありがとう、スカサハ」

「礼は味を見てからにしろ。見た目はまずまずだが、味は悲惨かもしれないぞ？」

「そ、そうなの？ でも、スカサハが作ってくれたのが何よりも嬉しいから」

「む……そういうものか」

「そういうものだよ。じゃあご飯もよそつちやうね」

「う、うむ……そういうものか……そうか……」

一人何故か頬を赤く染めながらも思案顔をしているスカサハを他所に、僕は炊き立てホカホカの白米をよそいながら彼女とカルデアを出た時の事を思い出していた。

『マスター』

カルデアを出た自分を、魔境の主、スカサハは颯爽と追いかけてきた。

『ど、どうしたのスカサハ？ あ、僕何か忘れ物でもしてた？』

『いや、そうではない。……マスター。お主の旅に、私も同行しよう』

『え？』

呆けた声を漏らした僕に、スカサハは穏やかな表情で、

『私は良いサーヴァントだからな。お前が外へ出ると言うのなら、それに付き従うよ』

彼女の言葉は実際有り難かった。

頼りになるというのもあったけど、それ以上に彼女と過ごす時間を僕は好いていた。

大きさに言えば、僕は彼女に恋をしていたのかもしれない。

でも、いや、だからこそ、

『……ありがたいけど、遠慮しておくよ、スカサハ』

僕は彼女の申し出を受け入れられなかった。

『君とこれからも一緒にいたいけど、でも僕は……君が一番求めるものを、与えられないから』

『私が一番……』

『うん。……君の死だよ、スカサハ』

彼女は言っていた。

死を望んでいると。

共に世界を救ってくれた彼女に、僕はそれを得てほしい。

でも、もはやマスターでも何でもなくなるこれからの僕では、その願いはきつと叶えられない。

『だから、さよならだ、スカサハ。……いつか、君の願いが叶うことを祈ってるよ』

『……そうか』

別離の悲しみに苛まれながらもどうにか笑みを浮かべてみせた僕に、スカサハはふむと頷いて、

『しかし、それは杞憂というものだ、マスター』

『へ？』

呆けた声を漏らした僕に、スカサハは穏やかに淡い微笑みを浮かべて、

『私は座に登録されたサーヴァントではない。此度限りの、特別な召喚だ』

『う、うん。それは知ってるけど……』

『故に、お主が死に、契約が破棄された時、サーヴァントとしての私は消滅し、二度と生まれまいだろう。……それは、私が焦がれてやまなかった死そのものだ』

『それは……』

詭弁ではないか、とそう言いたくもなかった。

だけど、彼女の言い分も正しいように思えた。

サーヴァントとしてのスカサハ。

僕というマスターに感化され、クー・フリーンの言葉が正しいのであれば影の国にいた頃よりもずっと人間性を獲得したスカサハは、今後この世界に現れる事はないだろう。

なら、それは彼女という個人の死とも言えるのではないか。

『お前が死ねば、私も死ぬ。我が悲願が叶うことは既に確約されているも同然と言

えよう』

呆然とする僕に、スカサハはそう言葉を紡いで、

『だからまあ、なんだ。それまでの暇潰しを、お前としてやろうかと思っただけだ』  
それから、どこか照れ臭そうに頬を赤らめた。

『なるほど……』

彼女の考えはよく分かったし納得もした。

確かに、僕との契約が終わればその時点でサーヴァントとしての彼女は死を迎えるだろう。

本来の彼女はどうか知らないが、少なくとも目の前の彼女は救われる。

……彼女の願いは、ようやく叶う。

『……む。どうしたマスター』

『え？』

『何故泣いている』

『あ……』

気づけば、僕は涙を流していた。

『嬉しいんだ、僕……君がようやく、救われる気がして……』

『……馬鹿者が』

ボロボロと涙をこぼす僕に、スカサハは呆れたように笑い、それから僕を優しく抱きしめた。

『女の前で泣く奴があるか、たわけ』

『ご、ごめん……』

『……だが、感謝するぞ、マスター。このスカサハの願い、その成就を祈ってくれた事に』

『スカサハ……』

『……しばらく目をつむっておいてやる。その間に泣き止め、マスター』

そう言って背中をぼんぼんと撫でてきた彼女に抱きしめられたまま、僕はしばらく泣き続けた。

『……落ち着いたか、マスター』

『う、うん……お見苦しいところをお見せしました』

『なら行くか。飛行機とやらの切符ももらった』

『準備万端だね……あ、あのさ、スカサハ』

『うん?』

『僕が死ぬまで暇なのは分かったんだけどさ。暇潰しならクー・フリーンたちと組  
手とかしての方がいいんじゃないかなと思って』

『……は?』

『いや、だって僕の日常なんて、きつと退屈極まりないだろうし。それならやっぱ  
りカルデアにいた方が……ってスカサハ?』

『……………』

彼女の事を想って告げた僕に、スカサハはひどく冷たい表情をしていて。

『す、スカサハ?』

『……たわけ』

『え?』

突然の罵倒と共に、スカサハはこちらに顔を近づけ、

『んっ……』

直後、唇に柔らかな感触が与えられた。

『す、スカサハ……?』

困惑する僕の眼前、スカサハは普段のクールな表情に幾らかの恥じらいと拗ねを

にじませていて。

『……ここまでせんと分らんか、馬鹿主が』

『えっ……えっ?』

そう告げて改めてハグしてきた彼女に、僕はただただ困惑するしかなく。それからしばらくして、状況を飲みこんだ僕は彼女との同棲を決めたのだった。

「あの時は本当にびっくりしたなあ……」  
リビングで一人、ぼんやりとつぶやく。

件の彼女は今入浴中だ。

「♪」

浴室からは鼻歌が聞こえてくる。

なんとも上機嫌そうだ。その理由を知っているからこそ気恥ずかしさが凄まじい。

『ハンバーグすごく美味しいよ！ さすがスカサハ!』

『う、うむ……なら何よりだ』

『それにしてもスカサハが洋食を作れるとは思ひもなかったな。あ、もしかして

練習したの？」

『……お主の好物だと聞いていたからな』

『え？』

『お前が予想以上に喜ぶものだから戸惑ったが……よいものだな、好物にはしゃぐお前の笑顔は』

『そ、そうですか……』

『おかわりはいるか？ マスター』

『……お願いします』

『ん、任せておけ』

『嬉しそうだったな、スカサハ……』

穏やかに微笑みを浮かべ、ハンバーグを頬張る僕を幸せそうに見つめていた。

あくまでクールな彼女だ、にこにここと破顔していたわけではないけれど、誰が見ても穏やかな心内をしている事は見て取れたと思う。そんな表情を彼女はしていた。

♪

思わず聞き入ってしまいそうな美声に、顔は熱くなるばかり。

そんなに喜ぶことじゃない、なんて事は口が裂けても言えないけど、さすがにあ

そこまで喜ばれるとなんだか照れ臭い。

しかし喜ばれる事や彼女が上機嫌なのは嬉しい。スカサハが楽しそうならもう何でもいい気すらしてくる。

さてどうしたものかな、と考えているうちに鼻歌は止まり、

「上がったぞ、マスター」

しばらくの後、パジャマ姿のスカサハがリビングへと戻ってきた。

風呂上がりの火照った肌からは大人の女性らしい色香が醸し出されていて。

「ん？ どうかしたか、マスター？」

「い、いや……み、水、飲むよね。入れてくるよ」

僕はそんな彼女から慌てて目を背けながらキッチンへと向かった。

それからそそくさとグラス二つに水を注ぎ、リビングへと舞い戻る。

そこではスカサハが壁にもたれかかるようにして座っていて。

「はい、どうぞ」

「ああ。気が利くな、マスター」

「いやいやそんな」

微笑む彼女に笑みを返しながら、自分もまた彼女の隣に座る。

距離は近いけど、正面に座って風呂上がりの彼女を直視し続けるよりは精神衛生的にマシだ。

同棲してからそろそろ一ヶ月が経とうというのに、僕はまだ彼女との日常に慣れていない。

それどころか、慣れる時が来るのだろうかと疑心暗鬼にすら陥っている始末だ。

「んっ、んっ、んっ……ふはっ。風呂上がりの水は何故こうも旨いのだろうな」

穏やかに微笑むスカサハに今も胸は高鳴り続ける。

綺麗だ、と心の底から思う。

まるで芸術品のような美しさを彼女は持っている。

本当に綺麗な人だ。

……僕にはもったいないくらいに。

「ん？ どうしたマスター？ 私の顔に何か付いているか？」

「い、いや、なんでもないよ！」

さらりとその長い髪を流しながらこちらに微笑みかけてくる彼女に慌てて首を振りながら、僕は今一度考えてしまう。

僕で良かったのか、と。

こんなにも綺麗で強くて頼りになる人と、一緒にいていいのかと。そう、不安になってしまふ。

「……マスター」

そんな僕の心境など彼女の前では筒抜けだったのだろう。

スカサハは僕に身をもたれさせ、その頭をこちらの肩に載せながら告げた。

「お前は勇士だ。私が認める程のな」

「そ、そうかな……」

「ああ。お前はただ一人のマスターとして全力を尽くし、ついぞ世界を救ってみせた。セタンタや私とて、武勇こそ立てたが世界を救った事はない」

だから、とスカサハはこちらを見つめ、

「誇るべきだぞマスター。お主は、成し遂げたのだからな」

「……うん」

「まあ、僕の旦那と言うには少しばかり頼りないがな」

「う……頑張ります」

最後の言葉にやや凹んだものの、先程心に巣食っていた不安はどこかへ消え去ってしまった。

「……ありがとう、スカサハ」

「……ああ」

礼を言った僕に、スカサハは頷き、

「……お主こそ、儂でよかったのか？」

それから頬を赤らめ、恥じらいを帯びた上目遣いで問うてきた。

「え？」

「いや、忘れる。影の国の女王を娶るのだ、口答えなど許しはしない」

「……意外と乙女な時あるよね、スカサハって」

チョコをくれた時も、らしくないと告げた僕に傷ついたと抗議していたっけ。

そんな彼女を可愛いなと思う僕の眼前、スカサハはフンと鼻を鳴らし、

「お主に感化されたままだ。本来の儂はこうではない」

「じゃあ僕だけのスカサハって事だ」

「つ……よくもそう甘ったるい言葉を口にできるな、お前は」

「浮かれてるだけだよ。……すごく嬉しいんだ。君と毎日を過ごせて」

「……愛想のない女だぞ？」

「確かに、表情はクールだけどき。優しいし、頼りになるし、それに時折可愛いな

つて……馬鹿にしてるわけじゃなくて、本気で可愛いなって思う事があるんだ」  
弁明した上で告げた僕に、スカサハは呆れたように笑う。

「このスカサハを可愛いとは……大きく出たな、マスター」

「ごめん。気に障ったなら謝るよ。可愛いは良くないかな。えっと、かつこいいの  
方がいい？」

「……いや、かまわん。お主の好きなように言うがいいさ。しかし、マスター」  
「何？」

問うた僕に、スカサハは再び恥じらいを帯びた表情で、

「その、なんだ……可愛いと言うなら、それ相応の対応をするべきではないか？」

「……可愛がれと？」

「……………」

問いかけに、しかしスカサハは何も答えない。

ただ、こちらにもたれかかってくるばかり。

……そういうところが可愛いんだけどなあ。

面倒臭可愛い彼女を前に、僕は一度深呼吸をしてから、意を決して口を開いた。  
「す、スカサハ！」

「ん？」

「お、おいで？」

「……………」

両腕を広げた僕を、スカサハはしばらく無言で見つめていたが、やがて頬を赤らめたまま正面から抱きついてきた。

「……………」

胸板へと押しつけられる柔らかかなマシユマロに思わず呼吸が止まりかける。

そんな僕を気にすることなく、スカサハは僕の首に両腕を回し、ぎゅっと抱きしめてくる。

「ん……意外とがっしりしているな、マスター。よく鍛えている」

「え？ ああ、うん。レオニダス、ズ・ブートキャンプのおかげかな。マシユと二人で散々鍛えてもらったから」

ふふ、懐かしいな。

暑苦しくも楽しかったあの頃を思い出していると、

「……………マスター」

「ん？」

ふと、彼女に呼ばれた。

スカサハは頬を赤らめながらも不機嫌そうな表情で、

「今は私と接しているのだろうか？ なら、他の師の名を出すな」

「ええ……」

嫉妬の仕方がおかしい……普通マシユの方じゃないのか。

「とうかスカサハは僕の師匠じゃないでしょ。お前とは師弟以外の関係を築きた  
いってスカサハ言ってたじゃないか」

「う、うむ、そうだったな。……まあ、こんな関係になるとは露も思わなんだが」

「……うん、そうだね。僕も夢にも思わなかったよ」

「……」

そう告げた僕の肩に、スカサハはすり、と鼻をすりつけてくる。

そんな彼女をおっかなびつきり抱きしめると、彼女は穏やかに言葉を紡いだ

「意外と悪くないものだな、お前に抱かれるのも」

「つ……！ うん、それは何よりだよ……」

「ん？ どうした？ 顔が赤いぞマスター？ さては何か別の事を考えたな？」

「か、考えてないよ！」

凶星を突かれ慌てふためく僕の耳に、スカサハはそつと口を寄せ、

「……私は、いつでもよいからな？」

そう、そつとやさやいてきた。

「っ……」

「お前ほどの勇士なら、この身を預けるのもやぶさかではない。なんなら今夜でもかまわん」

頬を赤らめ絶句する僕にそう告げながら、スカサハはより一層僕を強く抱きしめてくる。

その身体の感触に、僕の中の獣が目を覚ましそうになるも、

「……すいませんしばらく後でお願いします」

「そうか。なら、お主のタイミングに合わせるとしよう」

どうにかNOを突きつけると、スカサハは気を悪くした様子もなく受け入れてくれた。

危なかった……あのままだったら本能のままに彼女を抱いているところだった。

大切な彼女とするのだ、もつとこう……大事にしたい。

いや、でも本能のままに襲う方がケルト式なのだろうか……。

ううむ、と頭を悩ませる僕に、

「だが、せめてこのくらいは許せよ？ マスター」

「え？」

スカサハはさりりとそう言っ

「んっ……」

優しく、僕の唇を奪ってきた。

「っ……スカサハ……」

頬を赤らめながら恥じらい交じりに睨みつける僕に、しかしスカサハは穏やかな笑みを保ったまま。

「……愛しているぞ、マスター」

心の底から愛おしそうに、僕へそう告げてくるのだった。